

いろいろな思ひやり

同じ“思ひやり”と言っても、このやうに国により、民族によって大変な違いがあるので、どうしても誤解が生じ易い。だから、お互ひにその“思ひやり”の違いに“思ひやり”を致して、誤解が起らないやうに努力することが必要であると思ふ。同じ日本人の間であっても、関東と関西とでは、言葉に大変な違いがあるやうに、物の考へ方にも大変な違いがあって、それがよく誤解の種になるのである。

私は関東に生れ育った関東人であるが、ある時、関西の人に仕事を頼んだことがあった。その時、相手が「考へて置きます」と答へたものだから、文字通り「考へてくれてある」ものとばかり思って、その返事を首を長くして待ったものである。然し、待てども待てども返事が来ないではないか。それで到頭しびれを切らして催促に及んだ。すると、何と相手は怪訝な顔をするではないか。まるで「そんな話は初めて聞いた」といふやうな態度である。そこで私は、「考へて置きます」と返事しながら、相手はその事について全く考へてみてくれなかつた事を知り、その余りな無責任さに腹が立って仕方が無かつた、といふ経験がある。

その後、親しい関西の人から、「関西人の『考へて置く』といふ言葉は、実際には『考へる余地が無い』場合に使ふ言葉であつて、つまりは『婉

曲な拒絶』なのである。だから、半年も経ってから、断つたはずの話を持ち出されたのでは、相手の者はさぞかし面くらつた事だらう」と教へられると同時に、その無知を大いに笑はれてしまった。

それでも怒りの気持はなかなか治まらなかつたが、よくよく考へてみると、相手の申し出を無下に断るのは、相手の顔をつぶすことになって確かに良くない。そこで「考へて置きます」と言って相手の顔を立てる。さうすれば引込みが着くといふものである。また、それで引き下りたくなかつたら、「考へる所など無いぢやあないか」と言って食い下る余地はある。「考へて置きます」とは確かにうまい返事である、と思はれて来た。さうして、「やっぱり歴史の古い関西の人の方が、関東人よりも思慮が深いやうだ。これが文化の深さといふものかな」と思ふやうになり、怒りも治まって、遂に感心してしまつたものである。